●体験学習プログラム　～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の遠方地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ『体験学習プログラム』を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、学内の専任教員が企画・引率する２コースと、NPO・NGO が実施する海外のスタディーツアーの中から採択した、学生にとって学びの多い２コースを実施しました。

また、海外に比べて費用面でも参加しやすい国内プログラムでは、地域のさまざまな課題にも目を向け視野を広げる内容で、学内の専任教員が企画・引率するものを１コース、センターのボランティアコーディネーターが企画・引率するものを１コース実施しました。

さらに、各季の全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、その報告会を通じて本プログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深めるきっかけにもなっています。

		プログラム企画者・団体	行　先	テーマ	実施期間	人数
国内	学内企画	NPO 地球デザインスクール	京都府宮津市	公園を拠点としたまちづくりデザイン～市民による公園作りからまなぶこと～	2013年８月27日(火)～８月30日(金)／４日間	16名
国内	学内企画	政策学部講師　清水 万由子	鳥取県智頭町	過疎の山村再生と、魅力的なまちづくりを学ぶ	2014年２月10日(月)～２月13日(木)／４日間	15名
海外	学内企画	経済学部教授　松島 泰勝	アメリカ合衆国(グアム)パラオ共和国	島嶼社会における自立と共生を考える	2013年８月７日(水)～８月14日(水)／８日間	7名
海外	学内企画	社会学部講師　笠井 賢紀	フィリピン共和国	フィリピンで学ぶピープル・パワー	2014年３月５日(水)～３月12日(水)／８日間	8名
海外	学外企画	特定非営利活動法人 Link 森と水と人をつなぐ会	タイ王国	森にくらす人々と過ごす一週間～北タイのくらし、村の知恵に学ぶ～	2013年９月２日(月)～９月８日(日)／７日間	8名
海外	学外企画	特定非営利活動法人 テラ・ルネッサンス	カンボジア王国	地雷畑から『平和』を考える	2014年３月２日(日)～３月９日(日)／８日間	7名

○国内体験学習プログラム／京都府宮津市【夏季】

■参加学生	
池本　隼人（経済学部　国際経済学科　2年次生）	浦谷　倫佳（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）
江夏広太郎（文学部　仏教学科　4年次生）	遠藤　孝典（文学部　真宗学科　4年次生）
大屋　　亮（経済学部　現代経済学科　2年次生）	川橋　弘子（社会学部　臨床福祉学科　3年次生）
坂井　智子（社会学部　臨床福祉学科　3年次生）	德冨　貴子（国際文化学部　国際文化学科　4年次生）
仲田　匡志（社会学部　臨床福祉学科　2年次生）	西木　　将（国際文化学部　国際文化学科　4年次生）
平井　美咲（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）	福田　七海（社会学部　地域福祉学科　1年次生）
毛利　美咲（社会学部　地域福祉学科　2年次生）	山内　雄介（国際文化学部　国際文化学科　4年次生）
山口　美佳（社会学部　社会学科　1年次生）	吉見紳太朗（経営学部　経営学科　1年次生）
■テーマ	
「公園を拠点としたまちづくりデザイン　～市民による公園作りから学ぶこと～」	

■行　程

日　程	時　間	行　程	受入団体など
8月27日（火）	08：00	深草キャンパスを出発	
	08：15	JR京都駅経由にて宮津市へ	
		車中にて交流	
		・企画プログラムの説明	
		・担当者及び参加者紹介	
	11：00	オリエンテーション	セミナーハウス
		・事前課題の共有	
		・プログラム、公園の概要	
	12：00	昼食	食堂
	13：30	公園案内	園内
	15：00	プログラム①京都自然塾	子どもの森
	18：30	夕食	食堂
	19：00	プログラム②丹後語り部の会	研修室
	20：00	プログラム③星空ナイトウォーク	園内　※雨天順延
	21：00	入浴、就寝	
8月28日（水）	07：30	朝食	食堂
	08：15	公園出発	
	09：00	飯尾醸造　見学	飯尾醸造
	11：30	瀬谷高原　見学	上世屋（松尾地区）
	12：00	合力の家にて昼食	合力の家
	13：00	プログラム④ガイドウォーク	上世屋
	14：30	プログラム⑤里山の暮らし手仕事体験	藤織り伝承交流館
	17：20	公園到着	
	18：30	食事	食堂
	19：00	ふりかえり	
		入浴、就寝	
8月29日（木）	08：00	朝食	食堂
	09：00	公園整備ボランティア	園内
	12：00	昼食	食堂
	13：00	公園整備ボランティア	園内
	17：00	移動	
	17：30	入浴	風呂棟
	18：30	夕食	食堂
	19：30	ふりかえり、就寝	宿泊棟
8月30日（金）	08：00	朝食	食堂
	09：00	プログラム⑥郷土料理作り体験	子どもの森、ことこと
	12：00	昼食	食堂
	13：00	大学生から提案	セミナーハウス
	15：00	公園出発	
	18：00	京都駅、深草キャンパス到着	

池本　隼人
（経済学部　国際経済学科　２年次生）

私はこのプログラムの期間中、まちやお世話になった宿泊施設や公園で多くの自然を感じました。それらには全て普段の生活の中には無い素晴らしさがありました。

私たちが訪れた里山の集落はその閉鎖性故の問題を抱えており、色んな立場の方からお話を伺っていくうちに、一口に若者不足といってもそこには地域の難しい事情がありました。しかし、私たちがお世話になったNPO地球デザインスクールの方たちもですが、自分たちがその地の為に出来ることを精一杯やろうという強い意志や活力を感じることが出来ました。

私はそんな方たちの細かな気配りや優しさに触れ、とても感動しました。最終日の私たちからのまちづくりの案の発表では、私たちの学びのために協力して下さった皆様に少しでも感謝の気持ちが伝わるように精一杯考えました。

私は今回のプログラムで、自分に出来ることを一人一人が精一杯することで大きな力になることを学び、非常に貴重な体験が出来ました。

こどもの森にて
木製列車の線路の上を皆で一列になって進んだ

浦谷　倫佳
（国際文化学部　国際文化学科　３年次生）

宮津市で過ごした４日間は私にとってかけがえのない、大切な経験となった。長い間、自然と向き合っていなかったことに改めて気が付かされた。幼いころは当たり前だった自然を五感で感じながら無邪気に遊んでいた生活が、最近の私は学校と家を往復するだけの日々を過ごし、自然を五感で感じることの楽しさをすっかり忘れてしまっていた。里山や棚田を見てきて、自然の恵みは私たちが生きる上でなくてはならない、大切なものなのだということを改めて再認識することができた。人と自然が共に生活する空間の中で、自然の恵みを受ける為には、私たち人間による自然への手入れも必要不可欠なのだということを強く感じた。そして、根気強く丁寧に自然と向き合い、手入れをすれば、絶滅危惧種に指定されているミズオオバコが世屋の棚田に蘇っていたように、自然も人々の努力する姿に応えようとしてくれるのではないかと思った。

公園整備のボランティアで稲木立てをしているところ

江夏　広太郎
（文学部　仏教学科　４年次生）

私は今回のプログラムを通して、一生忘れられない本当に貴重な経験をさせて頂きました。美しい海や豊かな自然が広がる里山、満点の星空などの数えきれない魅力を発見しました。また、公園整備ボランティアや郷土料理作り体験を通して地元の人たちと交流しましたが、皆さん優しくて個性的で温かい人たちばかりでした。

今回のプログラムに参加して終わりというわけでなく、プログラムを通して学んだことや、３泊４日で気付いた宮津の魅力を多くの人たちに向けて発信していくことが大切であると私は

最終日の郷土料理作り体験
おばちゃんから包丁の使い方を教わっている

考えます。宮津の良さは一度来て頂ければわかるので、どうすればもっと多くの人たちに宮津の良さを知って貰えるかを考え続けることが大切です。

４日間という短い期間でしたが、学部も学年も異なる個性豊かな16人の学生やボランティアセンターの方々、海と星の見える公園のスタッフの方々や地元の方々との出会いに感謝したいです。

遠藤　孝典
（文学部　真宗学科　４年次生）

「自然との共生」をキーワードに、宮津市で学んだことや、地元の方の取り組みから自分が感じたことは、ただ緑が多く海があるということではなく、それをどう維持していき、どう活用しているのか、今回実際に足を運んだからこそ見えました。そこには地元の方の努力がありました。それは天の橋立の観光地としての宮津ではなく、地元の方が一体となってもっと自然が豊かで伝統が根強く残っている地としての宮津をPRすることです。まだまだ十分にPRできていないかもしれないですが、普段できない素晴らしい体験ができる場として本当に必要だと思いました。私たち学生も、様々な体験を通して気が付いたことを、若者の視点で提案ができたことによって「微力」になれたのではないかと思っています。そして私自身、今回のプログラムを通し「ボランティア」を見つめ直すことができました。

「地球の道」にて説明を受けている

大屋　　亮
（経済学部　現代経済学科　２年次生）

４日間の宮津市での活動を終えて、現地の方との交流や様々な体験から宮津市の魅力を多く知ることができ、その魅力を発信していきたいと思った。宮津市では天橋立の他に有名なものと問われると答えるのが難しいのが現状であるが、今回のプログラムを通して宮津市には伝統工芸や特産品等、天橋立にも劣らない魅力あるものがたくさんあると分かった。

宮津市の課題である人口の減少・過疎化の問題は、地域の衰退にも関わる大きな問題である。この問題の解決策としては、宮津市を知ってもらい定住したいと思えるような地域にしていく必要がある。そのためには、地域の魅力を多くの方に知ってもらう必要があり、人と人との繋がりを大切にして地域力を強めていくことが大事ではないか。また、宮津地域だけに限らず、どんな地域にも魅力あるものが何か必ずあるのだと感じた。

郷土料理をつくっている
地元で捕れた魚をさばいて刺身にする

川橋　弘子
（社会学部　臨床福祉学科　３年次生）

宮津で過ごした４日間は短かったけれど、貴重な体験をさせていただき、１日１日の生活はとても濃いものであった。実際に現地を訪れることで得られるものはとても多かったように思う。現地で生活し体験することが、その土地を知るための一番の近道になると感じた。訪問することは自分の目で見て感じることができるため、学びも深まり現状そのものを知ることができると思った。

稲木作りには多くの人の協力が必要であり、完成後の達成感を一緒に味わえたことが印象的であり、人々の結びつきを感じた。

稲木立ての組み立て作業

実際に現地に行った

からこそ、得られるものもたくさんあり、他の人にも一度は訪れてほしいと思った。普段の生活では体験できないことを経験することができ、有意義な４日間を送ることができた。宮津に行くことで、宮津の良さを自分の目で見て感じてほしいと思う。

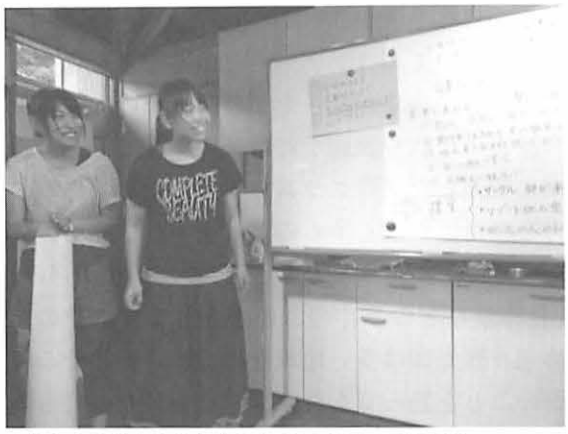
坂井　智子
（社会学部　臨床福祉学科　３年次生）

多くのことを学ぶことができたプログラムであり、自分自身を成長させることができた。実際に宮津市を訪れることで、今まで知らなかった、気づけなかった良さに気づくことができた。伝統工芸など普段では体験できないようなことを体験することができた。また、今まで全く知らなかった話なども聞くことができた。環境についての話を聞いて、現代の社会の生活について改めて考え直さなければならないと感じた。宮津市の現状や宮津市民の方々の話を聞いて、若い人の力が今とても必要とされているなと感じた。この先高齢化が今よりも進むと、大きな問題がたくさんでてきてしまう。とても考えさせられた。宮津市の方々はとても温かく、何事も丁寧に教えてくださり、楽しい話をたくさんしていただいた。３泊４日という期間の中で人の温かさ、自然の素晴らしさに触れて多くのことを学び、多くのことを考えさせられた。大学生活の中で貴重な体験をすることができた。このプログラムに参加できて心から良かったと思った。

世屋でのエコツアー

徳冨　貴子
（国際文化学部　国際文化学科　４年次生）

今回の国内体験学習プログラムで学んだことはコミュニティーの大切さ、異年齢間の交流の大切さである。日本の多くのまちが宮津市のように高齢化、過疎化の問題を抱えている。宮津の人々はそんな中でも自分たちの生まれ育ったまちに誇りを持っていて何とかして自分たちのまちを活性化したいという熱意があった。若い世代がもっとこの熱意のある人の輪に入り一緒になってまちづくりについて考えていかなければいけないと感じた。そして、未来を担う若い世代に自分たちのまちに誇りを持ってもらえるような機会をつくることが必要であると、この体験を通して考えた。


自分たちが考えたまちおこしのアイディアを発表

仲田　匡志
（社会学部　臨床福祉学科　２年次生）

４日間の体験学習プログラムにて、自然に人の手を加え、固有の生態系を持つ“里山”というものに初めて出会い、それぞれの場で地域の方々の説明、知識を聞いたり、目で実物を見てみたり、肌で直接触れてみることをしながら、それぞれで感じることがあり、その中で私たちの力で何が出来るかというのを、模索しました。日を重ねるに連れ、私たち自身宮津のファンになるほど好きになり、大学生を魅了するほどのポテンシャルがあるのになぜ観光客が少なくなっているのかを考えました。そこで私は特に、この地域の情報を魅力あるものとして発信する

地元企業の飯尾醸造を見学

力が弱いのではないかと感じたため、どのような方法があるのかを考えたところ、それは大学生にとって身近なものを活用したら良いのではないかと思い、またその方法は、今後の私のやりたいまちづくり支援にも使えるということも分かりました。

西木　　将
(国際文化学部　国際文化学科　４年次生)

私はこの４日間を通して天橋立しか知らなかったこの町のファンになりました。それはもちろん自然の豊かさ、食べ物、風景もそうです。自然についてエコツアーや自然塾などを通じその大切さ、ありがたさを学び、農業の大変さや宮津市の現状や課題など数多く学びました。地域に根差したプログラムであったため、地域の方との距離が近く多くのことを学び、感じ、体験することが出来ました。一方で高齢化が進み、PR 方法などの多くの課題があります。そのため元々観光客は多い地域なので、いかにそこで街のことを知ってもらい、ファンになってもらうかがこれからの課題だと思います。

宮津の郷土料理　つみれ汁とウゴ（海藻）を使った料理

平井　美咲
(国際文化学部　国際文化学科　３年次生)

私はこの４日間、「とにかく自然がきれい!!」と感じました。地元でとれる海の幸を使った料理もとてもおいしかったです。また、宮津市での龍大16人の仲間たちや、丹後の地元の方々、NPO やボランティアセンターの職員の方等、たくさんの人との最高の出会いに感謝したいです。

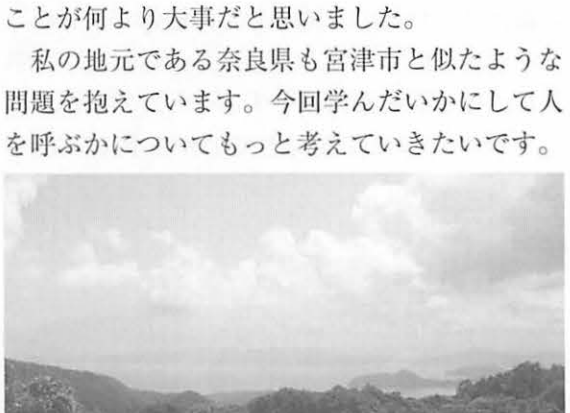
今日、宮津市は様々な社会問題を抱えています。人口減少や高齢化、特に過疎化が指摘されています。このプログラム中に私は、宮津市で女子旅ツアーと教育現場での強化が必要ではないかと提案しました。また、このプログラムをきっかけにもっと地域活性化について学びたいと考え、11月に宮城県石巻市雄勝町で東日本大震災復興支援ボランティアに参加しました。宮津と雄勝、これらの経験を通して、私は地域活性化のはじめの一歩はコミュニケーションをとることではないかと思いました。交流する大切さを学んだ今、私は出会った人とのつながりを大切にしていきたいです。

4日目の郷土料理作り

福田　七海
(社会学部　地域福祉学科　１年次生)

国内体験学習プログラムを通して、宮津市に人を呼ぶために私が必要だと思ったことは、地元の人の協力と地元の人から地元の良さを外へ発信していくことです。その地域の隠れた魅力、まだまだ外の人が知らない良さをアピールすることが何より大事だと思いました。

私の地元である奈良県も宮津市と似たような問題を抱えています。今回学んだいかにして人を呼ぶかについてもっと考えていきたいです。


世屋高原でのエコツーリズム

毛利　美咲
(社会学部　地域福祉学科　２年次生)

大学で参考書を読んで学ぶ座学だけでは得られない知識や経験を、その交流の中で地域の人々に聞いたり、自分の地域についてどのよう

な思いをお持ちなのかなどを聞いたりすることが、私が今回のプログラムに参加した理由の一つであった。

その目的通り、私は多くの人々と関わりを持つことが出来、また地域の人々の思いや、私以外の学生達の考えなどを聞くことが出来た。

私が最も印象的だと感じたのは飯尾醸造という企業のお客様とのつながりの考え方と、棚田保持への思いである。例えばどうやって使うのかレシピも提供していたり、商品の横に手書きだと思われる字体で商品の説明が書かれていたりした。

また棚田保持の為に利益にならないのにその景観を守る努力をしている姿が印象的であった。

最後にプログラムを終えて思うのは、今回共に3泊4日を過ごした学生達を含め、多くの人と関わり、自分では思いつかないような考えを聞くことが出来たのが今回の体験学習プログラムで一番良い収穫であると私は思った。

飯尾醸造の店頭

山内　雄介
（国際文化学部　国際文化学科　4年次生）

宮津での4日間、私たちは普段触れることのできない貴重な里山での体験と、温かい人々との交流をすることができた。エコツアーでは里山が創り出す生態系や、先人達が受け継いできた生活の知恵を自分の目で確かめることができた。魅力の詰まった農村体験だが、一方で訪れる人のニーズに現地のインフラ面などが対応しきれていないという課題もある。そして、農村を維持していくために必要な人材や高度な技術を伝承する後継者不足に直面しており、農村振興が急がれる状況である。しかし、地元の方たちは皆明るく、たくましく生きている。彼らの姿を見て、一緒に体を動かすことで私たちが五感で感じ取れるものは非常に多かった。2日目に見学した飯尾醸造のような地域貢献に真剣な6次産業や、NPO法人地球デザインスクールの方たちのように、現地に腰を据えて活動することの意義を再確認する体験となった。

食堂の方達と郷土料理を作る様子

山口　美佳
（社会学部　社会学科　1年次生）

私は、衰退しつつある故郷を活性化するために、このプログラムに参加した。そして、活性化するために、わかったことが主に2つある。

1つ目は、地元住民の意欲や積極性が必要であることだ。郷土料理、上世屋の案内、藤織り・柿渋の体験、丹後伝説の語り部など、ほとんどこのプログラムで関わった人は地元住民である。地元住民と実際にふれあうことで、この景観、伝統を守りたい思いが伝わってきた。つまり、地元の熱い思いがわかることで、このすばらしい景観が残る丹後地域を守りたいと思い、また丹後地域に足を運ぶようになるのだ。

2つ目は、新しい観光をつくることである。

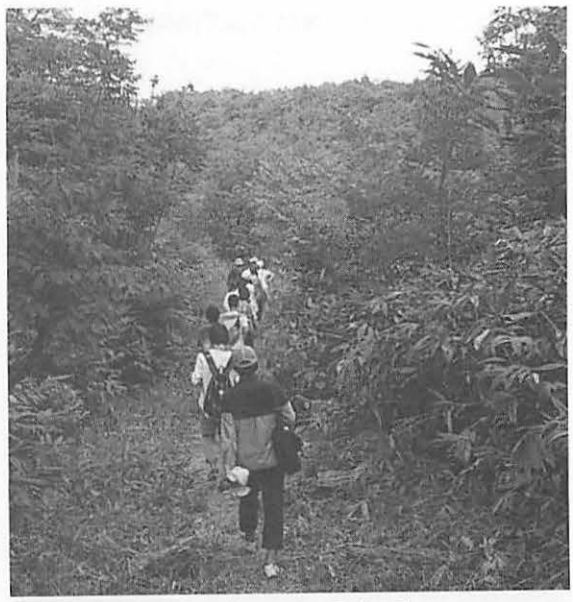
男結びを習う

このプログラムでは、私達参加した学生たちが丹後をより発展させるための方法を提案し発表する機会があった。そこで、マラソン大会を開き、そのコースでスタンプラリーを設け、そのスタンプがたまると地元産のものと交換できる、また、女子が好むような恋愛などのパワースポットのツアーを作るという案が出ていた。この案を私の故郷でも活かしていきたいと思う。

このように、このプログラムでは多くの人とふれあうことで、今のままでいいのか、もっと自分が成長するために何か行動した方がいいのかなど、改めて自分と向き合うことができた。今後、このプログラムで学んだことを活かして、故郷のために私ができることを精一杯していきたいと思う。

吉見　紳太朗
(経営学部　経営学科　1年次生)

私が今回のプログラムに参加したのは、地域に関わる仕事がしたかったので少しでも地域の実情を知りたかったからである。実際に行ってみて、宮津は、天橋立以外にも里山や海といった豊かな自然やおいしい食べ物、様々な歴史など数多くの魅力が存在している地域であることがわかった。しかし、広告戦略が上手くできておらず、あまり知られてないので、今後あまりお金のかからないSNSなどを使って今まで知らなかった人への周知をしなければならない。また数多くの魅力がある宮津だが、それでも高齢化が進み、過疎地になっていっている現状があり、宮津でこの状況なら他のあまり魅力をもっていない地域はどうなるのかと思った。そこを今後の大学で学んでいく必要があると思う。


NPOの方の案内で山を散策しているところ

○国内体験学習プログラム／鳥取県智頭町【春季】

■参加学生	
片桐　悠（政策学部　政策学科　2年次生）	久島　同登（法学部　法律学科　4年次生）
久保　文音（社会学部　社会学科　1年次生）	田實　将史（社会学部　社会学科　1年次生）
谷口　真（社会学部　臨床福祉学科　3年次生）	塚本　有紗（社会学部　社会学科　2年次生）
中西　雛子（文学部　英語英米文学科　1年次生）	成瀬　陽一（法学部　法律学科　4年次生）
西川　浩由（国際文化学部　国際文化学科　1年次生）	西山　智浩（社会学部　社会学科　2年次生）
平舗　眞子（法学部　法律学科　1年次生）	村上　桃子（社会学部　社会学科　2年次生）
山口　智規（理工学部　数理情報学科　3年次生）	山口　美佳（社会学部　社会学科　1年次生）
吉川　伸哉（社会学部　社会学科　1年次生）	
■引率教員、テーマ	
清水　万由子　講師（政策学部）「過疎の山村再生と、魅力的なまちづくりを学ぶ ～木の宿場プロジェクト、疎開保険、民泊体験～」	

■行　程

日　時		行　程	受入団体など
2月10日（月）	8：00	深草キャンパス出発→JR京都駅経由→智頭町	
	11：00	智頭町（宿場町の町並み、石谷家住宅）見学	智頭町観光協会
	13：30	講義	ボランティアガイド
		・「智頭町の現状と課題」	智頭町役場
		・木の宿場プロジェクト、100人委員会、新鮮組、森林セラピー、疎開保険、民泊等	智頭町木の宿場実行委員会
		・町職員を交えてグループワーク、質疑応答	
	16：00	民泊先へ移動	
		【民泊体験】	智頭町民泊協議会
2月11日(火･祝)	7：00	雪かき体験（民泊先と周辺の独居高齢者宅）	
	8：30	民泊から山形地区共育センターへ移動	山形地区振興協議会
	9：00	旧山形小学校（山形地区振興協議会）見学	
	9：30	講義「山形地区のむらおこし」	芦津地区男性2名
	12：00	ドラム缶ピザ焼き体験	八河谷地区男性1名
	13：30	聞き書き体験	
		「伝統文化と人々の暮らしの聞き書き実践」	Iターンの若者
	18：00	山形地区、地元の方との交流会	林業15代目ご夫婦
	20：30	民泊先へ移動	
		【民泊体験】	智頭町民泊協議会
2月12日（水）	8：30	民泊から観光協会へ移動、前日のふりかえり	
	9：30	講義「森のようちえんの取り組み」	特定非営利活動法人森のようちえんまるたんぼう
	11：30	いろりの家で田舎暮らし体験	いろりの家
		・火おこし、いろりで料理、豆腐手作り体験	良菜会
		・良菜会の取り組み紹介	芦津区会
		・芦津の森、環境保全の話	
	16：00	民泊先へ移動	
		【民泊体験】	智頭町民泊協議会
2月13日（木）	8：30	民泊から役場へ移動、前日のふりかえり	
	10：00	町長とディスカッション	智智頭町役場
		「智頭町の魅力とまちづくり施策」	
		質疑応答	智智頭町観光協会
	13：30	スノートレッキング体験（セラピー弁当）	
	16：00	智頭町芦津を出発、車中でふりかえり	森森のガイドの会
		道の駅休憩	
	19：00	JR京都駅経由、深草キャンパス到着、解散	

片桐　悠
（政策学部　政策学科　２年次生）

今回の春季国内体験学習プログラムに参加して感じたことは、自分にとっての「当たり前」は時間や場所、人が変われば変化するという事です。至極当然の事ですが、その事を改めて感じさせてくれたのが今回の智頭町での体験でした。

そんな智頭町は今現在「都会からの疎開」をテーマにグリーンツーリズムを展開しています。

私も今回のプログラムで民泊やスノー・トレッキング、地元の野菜を使った料理等を体験しました。民泊やスノー・トレッキングは初めての体験だったのですが、ゆったりとした時間の流れの中で楽しい経験をさせていただきました。

また、私が智頭町に滞在してグリーンツーリズムをここまで展開できる要因として感じたものに智頭町「日本１／０村おこし運動」という智頭町独自の仕組みと町長の寺谷誠一郎さんの尽力が挙げられます。

智頭町には皆さんが想像している以上に素敵な事がたくさんあります。ぜひ、皆さんも一度智頭町に疎開してみてください。

地域の皆さんと交流会を行いました。Ｉターンの若者、地域おこし協力隊の女性にも出会いました

久島　同登
（法学部　法律学科　４年次生）

私は①先進的な取り組みを行っている智頭町に興味を持ち現場に行くことで深く知りたいと思い、②過疎の町の現状を知りたいと思い、③移住者が増えている魅力ある町を見てみたいと考え、今回の体験学習に参加した。①に関して、「百人委員会」の成果の１つである「森のようちえん」は移住者の方が提案し、それに行政が予算を出すことで実現している。このお話を聞き行政の町を良くしていきたいという考えと、町を活性化したいという住民の思いが、合わさることで、住民自治によるまちづくりができているのだと理解できた。

また、過疎化の問題もやはり家族が外へ行くことは寂しいという意見を聞く一方で、智頭町に移住者が増えていることからまた町が賑やかになるのではとも感じた。また、智頭町を実際に訪れてみて、自然が多くリフレッシュできる所であり、また移住者を手助けしようという風潮もあることから、移住を決意するのだと感じた。

このプログラムで一番感じたことは、誰かに協力してもらっているということに気づき、感謝をすることである。民泊で私たちを泊めて下さった家庭には本当に感謝をしている。この気持ちを常に意識していこうと思う。

民泊先は、温かく気さくなご家族で、おじいちゃんの家に遊びに来た感じでした

久保　文音
（社会学部　社会学科　１年次生）

このプログラムで新しく興味を持ったことは93パーセントもの面積がある森を使った森林セラピーと森のようちえんである。森林セラピーは体験したいと思い森のようちえんはお話を聞いてこんな形の幼稚園があるのかと驚いた。民泊体験をしてみて民泊体験でしか知ることのできない地元の生活や智頭の人々の温かさを知った。智頭の食材を使った料理はとてもおいしかった。シカを見たりなど智頭町ならではのことが出来て楽しかった。

このプログラムで地域の方たちとの交流を通して地域活性とは何なのかということに疑問を持っていたけどすこしではあるが地域活性の基本のようなものがなんとなくわかった気がした。智頭町で学んだことを活かして活動していきたい。また智頭を訪れたい。

民泊で雪かき体験、重労働です

田實　将史
(社会学部　社会学科　1年次生)

2月10日から13日まで、私は鳥取県にある智頭町を訪れた。私が智頭に行って一番初めに感じたのは人々の顔が生き生きとしている、ということだった。私達は智頭で町役場の人たちにお話しを伺ったのだが、どの方も自分の関わっている事業や町おこし運動のことをとても楽しそうに話していた。もちろんどれにも課題はあったりするのだが、そのことをどのように乗り越えていくのか全員がポジティブに考えていた。

もう一つ、智頭での生活の中で感じたことがある。智頭の人たちは何かを「やる」という活力にあふれていた。自分たちで作った野菜を村で売って、その野菜が売れることでお金を稼ぎ「また頑張ろう」と、自分たちで生きる力、気力を生み出していると感じた。自分でやりたいことを選び、自分自身で生きていく力を作っていくその姿勢は自分の目には輝いて見え、魅力的に思えた。

この3泊4日の活動は本当に素晴らしかった。自分が今まで経験したことのない、本当に大切なものがつかめた気がする。これからもこのような時間を自分の人生においてたくさん持てるようにしていきたい。

「今は田舎の時代。都会で疲れた人には、疎開のまち智頭へ来てリフレッシュしてもらいたい」と町長

谷口　真
(社会学部　臨床福祉学科　3年次生)

「地域は活性化しない、人が変わり、人は活性化することができる」智頭町民の方が言っておられた言葉です。私はこの言葉にすべてが含まれていると感じました。智頭町の様々な取り組みは、町民から出されてきたものが多く、それを実現するために行政と力を合わせるというものが感じられました。地域を元気にするためには、そこに住んでいる人を元気にしなければいけないということを、この言葉から学びました。

福祉というのは、身体が不自由になってからどういった取り組みで支えていくのかと思ってしまいがちですが、今回、智頭町の取り組みを知り、元気な状態を維持するという、こういった形の福祉というものも大切な取り組みだということを学びました。

今回の体験プログラムは、現地の人と関わり、話を聴いて学ぶことが出来ました。実際、聴くことでどういった形で人が、考え方が変わってきたか感じ取ることもできました。

聞き書きに応じてくれた90歳の“八河谷集落のドン”はすこぶるお元気で、移住してきた人の力になりたいとのこと

塚本　有紗
（社会学部　社会学科　２年次生）

私は、まちづくりを町民とともに積極的に進めている行政の姿と、その町に住む人々の姿を見たくてプログラムに参加した。智頭町の、「よそ者を入れない閉鎖的空間」から「観光地にしていく」という方向性に最初は町民にも戸惑いがあったそうであるが、沢山の町民の助けや知恵を借りて今までやってきたと町長はおっしゃっていた。智頭町独特の施策にもそれがはっきりと表れていて、智頭町の魅力のひとつに挙げられる。自分の町と比較してもその点が一番魅力を感じられた点である。

また、智頭町は「みどりの風が吹く疎開のまち」と掲げて、観光産業を進めている。ストレスで疲れた人が逃げ出せる場所でありたいという意味で疎開と名付けたという。今回民泊を体験したが、人との出会いを大切にされている方が大変多く、自分の故郷ではないのにほっと出来る環境であった。今回のプログラムで、智頭町の魅力が今までよりももっと感じられるようになった。智頭町の魅力が多くの人に広まり、沢山の観光客がそこを訪れ元気になって欲しいと思っている。

ガイドさんに案内していただき、約２時間、雪の中の森林セラピーを楽しみました

中西　雛子
（文学部　英語英米文学科　１年次生）

私がこの国内体験プログラムに参加した理由は、自分が住んでいる地域とは違った地域での生活を知って、地域に対する新しい見方を発見したいと思ったからです。このプログラムでは、智頭町の方々と交流する機会がたくさん設けられていて、智頭町の昔のことから、今のことまで知ることが出来ました。自分が住んでいる地域と違うところは自然環境の違いや、人口もありましたが、なによりその町のことに積極的に知り関わっていく姿勢ではないかと思いました。

このプログラムで一番印象に残っていることは、町長さんのお話です。智頭町のユニークな取り組みはどのような考えのもとに作られているのかというと、住民全員の積極性もそうだし、智頭町に今あるものを使ってどれだけ町を活性化していけるのかにあると思いました。この体験プログラムを通して、自分とは別の地域の方々と交流することの大切さが分かりました。それは自分の人生観にも繋がるし、何より交流したことによりお互いを尊重することを学ぶ機会でもあるのだと思いました。

山形地区振興協議会で1/0運動などまちづくりの話を伺いました。廃校になった小学校が拠点です

成瀬　陽一
（法学部　法律学科　４年次生）

智頭町では、地域にある資源をいかした取り組みが様々行われている。また、その資源をいかそうとする「人との出会い」を大切にしている町の姿勢にまちづくりの１つの答えがあるのではないかと感じた。

また、田舎でのまちづくりの強みは、住民に密着した政策や行動が取れることであり、住民の意見を反映できることだと感じた。過労死や自殺が多く、人との結びつきが希薄になりつつある現代の日本が今一度見直すべき、生活や自然がここにあるのではないだろうか。

智頭町のまちづくりには、田舎のまちづくりの１つの答えがあるように思う。無理に産業復興しようとするのではなく、存在する地域の財産をいかすことで、「外者」にとって魅力的な町になるのではないか。そして行政が、住民一人ひとりの意見に真摯に向き合う姿勢こそが、今後のまちづくりの発展に資するものとなると実感した。

智頭の森を活用した「森のようちえん」の代表西村さんの話に引き込まれました

西川　浩由
（国際文化学部　国際文化学科　１年次生）

智頭町の魅力は第一に、智頭町民のみなさんであると考える。私は、所謂「町づくり」は町の行政が主体となって行うものだと考えていた。しかし、この国内体験学習プログラムを通して、智頭町民の方々は智頭町の活性化のために自ら智頭町の行政に参画しておられる事が分かった。その中でも民泊がとても魅力的であった。これは智頭町が推進している「森林セラピー」の中のプログラムの一つである。あらかじめ宿泊用に用意された施設ではなく、智頭町民の御自宅に宿泊するというものである。私も３泊利用したが、普段では体験できない事が体験することができたり、何よりも民泊先の方々との食事が楽しかった。

森林セラピーとは、智頭町を、心身をリラックスさせるための場として提供するプロジェクトである。これは現代社会の抱える、ストレス、自殺、鬱といった問題に対処するためのプロジェクトであり、智頭町をはじめとする田舎が独自に持つ豊富な自然の力が必要になる時代が近づいてきていると考える。

民泊先でイノシシの肉を使った餃子を作りました
このイノシシはご主人が山で狩猟

西山　智浩
（社会学部　社会学科　２年次生）

今回の鳥取県智頭町への国内体験学習のプログラムを通しての私の目標は「田舎暮らしをするための知識をより多く知る」ということであった。体験学習では交流会で大阪府からＩターンで移住して来た人の経験談を聞くことが出来た。話によると、Ｉターン就職をするうえで気を付けることは「その地域のニーズに対応した職種を知る」ということであった。田舎暮らしを希望しているなら職種にはあまりこだわらず、「田舎で暮らしたい」という気持ちの強さで実行していくのではないかと私は考えた。今後は自分の希望する地域にはどのようなニーズがあるのか、あらかじめ調査をしたうえで移住や就職について取り組んでいきたい。

また、この４日間の体験実習で感じた違いは、そこに住む高齢者たちの生活の意識であった。智頭町に住んでいる高齢者の方たちは、私が民泊した２軒の方を含めて全員が若々しく生き生きと生活していた。このように過ごしていけるのはよい意味で「何もない」環境が個人個人に対して多くのことに挑戦する意識を向上させているのではないだろうか。

生業としてきた林業のお話、「一番大事なのは、昔の人の思い・経験を今の若い人が学ばんといかんな」

平舗　眞子
（法学部　法律学科　１年次生）

今回このプログラムに参加することでたくさんのことを学んだ。雪国の暮らしの体験とまちおこしについて中心に学んだ。今回のプログラムを通して強く感じたのは地域の人たちが智頭町のことを本当に大切にしているということである。そしてそのことが地域の活性には重大だと考えることができる。

私たちは今回３泊とも民泊であった。民泊は

旅館とは違ってご飯の用意など自分たちのことは全部自分でというものである。だが私たちは至れり尽せりですべて宿泊先の方がやってくださった。そのおかげなのかはわからないがたくさんのお話をすることができた。そして、この４日間、智頭町のまちおこしについてたくさんに聞くことができて、とても関心がわいた。とても面白いPRなのだ。この町の方々はこんなにも柔軟な考え方ができるのかと驚いた。

この町は小さな町だが、だからこそできることがたくさんあるということを知った。

スノートレッキング体験で雪の斜面を登りました。耳を澄ませば、鳥の声と小川のせせらぎ

村上　桃子
（社会学部　社会学科　２年次生）

今回のプログラムでは今までの自分の生活では体験できなかった豆腐づくりやスノートレッキングといった様々な体験ができたことが私の中で大きな経験値になった。そしてほかにも民泊での暮らしや多くの人たちの触れ合いを通して自分の価値観が変化していると気付いた。

私はずっと田舎は不便というイメージがあった。実際民泊先の人たちは「なんにもない」「不便だ」と言っていたが、みんな充実した表情をしているように感じた。確かに都会と違い大変な部分もあるだろうが、それでも智頭での暮らしは本当にいいものなんだとわかった。短い間だったけれど智頭に泊まって、楽しくて尚且つ落ち着ける場所なんだなと感じた。田舎というだけでどこか敬遠しがちだったけれど、だからこそ日々の生活に疲れてしまった時にはぴったりの 場所なんだと思えた。疎開のまちというフレーズの意味がやっと理解できたように思えたし、智頭への印象や捉え方が大きく変化した。智頭での暮らしはきっといろんな人の安らぎの場所になると実感した。

できたての豆腐を生まれて初めて食べて、とてもおいしく感じました

山口　智規
（理工学部　数理情報学科　３年次生）

今回の春季国内体験プログラムを通して、智頭町の行政の取り組みや地域に対する考え方が私にとってとても印象に残る４日間でした。日本１／０村おこし運動や百人委員会など本当に智頭町に何が大切なのか、どのようにして智頭町の良い所や風土を生かしたもの生かしていこうと考えておられるのかが伝わってきました。町長さんや森のようちえんの代表者である西村さんの話を聞いていても、何か今後の子どもたちの事を考えておられると感じました。

また、民泊先では本当に温かく迎えていただき、民泊先の方の経験談や考えを聞くことで、就職活動をする前にお話を聞けて良かったと思いました。今大事な時期ではありますが本当に今後の人生で大切なことを学んだように感じました。都会にはない智頭町の良さを存分に感じることができ、今後の活動に生かしていけたらと思います。

「いろりの家」では良菜会の皆さんに豆腐作りを教わり、いろりを囲んでたっぷりとお話を伺いました

山口　美佳
（社会学部　社会学科　１年次生）

私はこの国内体験を通して、故郷の奈良県吉野郡下市町が発展するための方法を考えた。

まず、智頭町のまちづくりの取り組みを述べる。ひとつは、外部から多くの人を呼び込む取り組みだ。例えば、民泊体験、石谷家住宅の一般公開がある。ふたつめは、住民が自らまちづくりに参加する環境づくりだ。智頭町では、「日本1/0村おこし運動」を実施している。この運動は、集落や地区の事業・活動に対して町が助成金などで支援する運動である。

その一方で、下市町は外部から来る人を拒む文化がある。また、住民が積極的にまちづくりに参加できる環境がない。このように、下市町はまちづくりに必要な条件を満たしていない。

では、どうすればいいのか。林業の衰退という同じ問題を抱えている町で林業発展のために協力するべきだと私は思う。特に智頭町はかつて林業で栄えてきた町であり、下市町も吉野杉という林業で栄えてきことから共通点がある。さらに、林業は日本全体の問題であるので、下市町と智頭町の協力は、日本の林業の発展につながると思う。

山形地区の皆さんに作り方を教わりました。ドラム缶で焼いたピザはとてもおいしかったです

吉川　伸哉
（社会学部　社会学科　１年次生）

今回の国内体験プログラムは地方都市の新しい事業を積極的に行っている鳥取県智頭町に行くものだった。聞き書き、役場の方々とのディスカッション、民泊、町長さんのお話、地域の保存会の方々のお話、色々な方の色々な話を聞いて智頭町を何とか良いものにしていこうと努力しておられる姿や思いを見させていただいた。聞き書きをはじめとして先人が残してきた知恵を文章化して後世に残していくことの重要性も聞かせていただいた。智頭町は町民と行政が一つになって町の行く先を決めていたことも強く印象に残った。広大な山林を使った森林セラピー、森のようちえんをはじめとした美しい山間の里山の風景や地元で生産した食材は都会でのストレス社会から逃れるための疎開の町という存在の重要な要素であり、まさに戦後の成長の中で捨ててきた古き良き日本を再現しようとしている。Ｉターンや智頭町に愛着を持った人が都会から移り住んでくるようにこれからは田舎の魅力が少しずつでも確実に広まっていくのかもしれない。

智頭町の若手職員さん４人から施策のお話を聞き、その後にグループディスカッション

引率教員講評
清水　万由子　（政策学部　講師）

今年度の国内体験学習プログラムは、昨年度とは異なり厳冬期の実施となりました。雪深い２月の智頭町で、都会っ子の学生15人を引き連れて、どんな体験学習が可能なのだろうか？期待と不安の中でボランティアコーディネーターの古澤さんと打合せを重ね、１月には下見を行って智頭町の方々にアドバイスをいただき、３泊４日のプログラムが出来上がりました。地域を知ろうとする際に４日間はあまりにも短いと言わざるを得ませんが、際立った成果が見られるまちづくりの取組みを中心に、短時間でもその本質を理解できるように各所で地元の方々が対応してくださいました。

４日間を振り返り、「地域が人を育てる」ということを改めて実感しました。昔の村には村仕事や寄り合いや、いろいろな付き合いがあり、お互いに支えあって暮らしていました。学校など行かなくても、村の中で上の世代から教えてもらって仕事を覚え、人付き合いを覚えていく。

現在の人材育成はすっかり様変わりし、人材育成は学校の専売特許かのように思われる風潮があるように思います。たった４日間でしたが、学生は智頭町で暮らしてきた人生の先輩たちに、たくさんのことを教えてもらいました。教科書には書いていない、山仕事の名人の人生。おらが村のことを考え続けた人生。そこへ行かなければ触れることのできない空気、水、土、食べ物、人、歴史。今はまだ、それらが整理されないままに参加者の記憶の中に溜まっているのかもしれません。これから、自分が暮らす地域で、あるいは違う地域を訪れたとき、そして誰かの人生の物語に接したとき、きっと智頭町で得たものが再び蘇り、彼らの背中をそっと押してくれることを願っています。

慣れない環境と初めての経験でいっぱいの、凝縮したプログラムで、学生たちには少々過酷かと心配しましたが、杞憂でした。若者はたくましく、最後まで自分の身体と心をフル稼働させて学びきってくれたと思います。

このプログラムが智頭町の皆さんの全面的なご協力のもとに実施することができましたことを、心よりお礼申し上げます。本学学生との交流の中で、もしも智頭町の皆さんにとっても新たな発見や喜びがあったとすれば、それも本プログラムのたいへん重要な成果であり、引率教員として望外の喜びです。ありがとうございました。

智頭町若手職員の皆さんと直接話をする機会を作っていただき、貴重な経験ができました

○夏季海外体験学習プログラム／アメリカ合衆国（グアム）・パラオ共和国【夏季】

■参加学生	
東　由梨（文学部　英語英米文学科　2年次生）	木曽　麻理（短期大学　社会福祉学科　2年次生）
塩見百合子（社会学部　臨床福祉学科　3年次生）	辻　淳志（政策学部　政策学科　1年次生）
寺田　眞優（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）	中林　紀子（文学部　英語英米文学科　2年次生）
前田夏奈子（経済学部　国際経済学科　2年次生）	
■引率教員、テーマ	
松島　泰勝　教授（経済学部）「島嶼社会における自立と共生を考える」	

■行　程

日　程	場　所	時　間	活動内容
8月7日（水）	関西国際空港 グアム	11：15 16：00 17：00	集合、ユナイテッド航空にて空路グアムへ グアム着 ホテル着　【グアム泊】
8月8日（木）	グアム	08：30 18：00	グアム大学学生と「パガット」へのハイキング グアム政府脱植民地化委員会事務局長宅にてバーベキュー 【グアム泊】
8月9日（金）	グアム	09：00 11：00 午後	グアム政府の脱植民地化委員会事務局長に対するインタビュー グアム大学授業参加、昼食、交流等 スーパーやアウトレット等の商業施設の見学　【グアム泊】
8月10日（土）	グアム	09：00 10：00 22：10	イパオビーチ・GVB訪問 ビーチにてゴミ拾いのボランティア 島内のバスツアーへ　アガナのチャモロビレッジ、スペイン広場等、イナラハンのグアム歴史村、マゼランの上陸地等、グアム博物館等見学 仮眠後、パラオへ出発
8月11日（日）	パラオ	00：35 10：00	パラオ着　仮眠 エコツアーに参加　【パラオ泊】
8月12日（月）	パラオ	終日	JICAパラオ事務所、日本大使館、台湾大使館、パラオ観光局への訪問、インタビュー　【パラオ泊】
8月13日（火）	パラオ	午前 午後 夜	Palau Community Collegeの学生との交流 パラオ政府庁舎への訪問、意見交換 空港へ移動
8月14日（水）	パラオ 関西国際空港	02：30 05：35 07：15 10：15	パラオ発 グアム着 グアム発　空路関西空港へ 関西空港着、解散

東　由梨
（文学部　英語英米文学科　２年次生）

訪れてまず、私が思っていたよりもパラオ・グアムの繋がりが強いことに驚きました。グアム・パラオへは観光業がとても重要な位置を占めています。その主となる観光客は日本人です。グアムは、去年130万人もの観光客が訪れましたが、その中の100万人が日本人だそうです。町を歩けば、どこでも日本語が目に入ります。それだけ、日本に親しみを抱いてくれているのだろうと、うれしく感じました。

しかし、戦争時の日本が犯してしまった悲しい過去を知り、表面だけを知るのではなく、過去を知り、考なければなれないと感じました。

このプログラムで一番のお土産となったのは、世界に対する興味と英語への意欲です。この気持ちと経験をいつまでも忘れず、これからも挑戦していきたいです。

太平洋戦争記念館の前での撮影
黒い潜水艦のようなものは、戦争時代の人間魚雷

木曽　麻理
（短期学部　社会福祉学科　２年次生）

私は今夏、海外体験学習プログラムでアメリカ合衆国（グアム）・パラオ共和国に行って、たくさんの人と関わることで、国際交流を実現することが出来た。また、アメリカ合衆国（グアム）・パラオ共和国の経済問題、政治問題、環境問題について様々な知識を身に付けるとともに、日本との関係についても詳しく学ぶことが出来た。私たちはボランティアとしてイパオビーチの美化活動を行ったが、観光地であるため様々な人が訪れるビーチはゴミが多く、自然を守り保護していくことが重要である。国際交流としては、グアム大学生には日本語を話せる学生も少人数おり、日本との関係の深さに驚いたとともに、国境を越えて関わることの大切さを学んだ。パラオの学生の中には日本の大学に行きたいという学生もいて、もっと留学生制度が整うことが必要ではないかと思った。

グアム大学の学生とグループに分かれて英語で意見交換を行っているところ

塩見　百合子
（社会学部　臨床福祉学科　３年次生）

本プログラムに参加して、グアム、パラオで貴重な体験ができ、学ぶことがあった。

グアムでは、昔のグアムの観光はショッピングや海で泳ぐことが目的の単純な観光だったが、現在はチャモロ人やチャモロ文化と触れ合うようなグアムの歴史を観光する形に変わってきていることを知った。そして、今回、グアムのイパオビーチでゴミ拾いのボランティア活動をしたが、ゴミの多さに驚いた。グアムの住民、観光客共にマナーを守る大切さを広めていく必要があると感じた。

パラオでは、パラオの人々が環境はパラオの資源であり財産であると感じている。現在の美しいパラオの環境を守っていくことが一番大切なことであり優先することであるため、もっとたくさんの観光客に来てほしいのだが、環境を守ることを第一優先に考えていく中で、自然に観光客が増えていってほしいとパラオの人々は言っていた。ここまでして環境を第一に考え守っている国があることを初めて知った。

グアムのイパオビーチにてゴミ拾いのボランティア活動をしているところ

辻　淳志
(政策学部　政策学科　1年次生)

私は今回の海外体験学習プログラムに参加するに当たり、1つのテーマを持っていました。地域や島全体の活性化の面において、2つの小さな島であるグアムとパラオは観光によって支えられていて、それぞれの工夫を知り、今後の学びに活かしたいと思い参加しました。

グアムとパラオが決定的に違うのは、グアムはこれまで観光による収入を第一に考えて観光のために開発をしすぎて自然を壊してしまったのに対し、パラオは観光よりも環境保護を優先的に考えています。そのため税が高く設定されています。逆に、それが観光客を引き付けています。また、そのような努力からユネスコの自然遺産に登録され更なる観光客の増加が期待されています。

私はこのプログラムに参加し様々なことを学びました。中でも、同じ観光地でも考え方の違いがあることから、様々な活性化の方法がありその地域に応じた政策を行っていく必要があると思いました。

パラオの日本大使館を訪れたときの写真
大使館事務局長に話を聞いているところ

寺田　眞優
(国際文化学部　国際文化学科　3年次生)

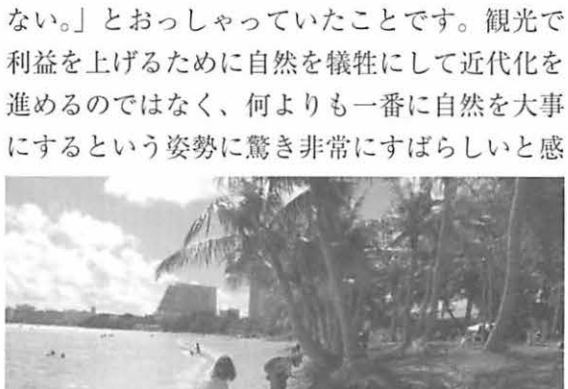
日本は近頃、海外のメディアで非難されることが多くなったように思います。しかし、今回私たちが訪れたグアム、パラオは日本を快く受け入れてくれる場所でした。日本の沖縄と同じ問題を抱えており、親近感を感じていました。日本がアジアのリーダーになってほしいと思ってくれていました。日本の手助けがその地の重要な生活の一部になっていました。自分の住んでいる国が親しく思ってもらえることを嬉しく思いました。

そして、今回のプログラムでは、グアムの未来のために尽力している方へのインタビューや、米軍基地予定地のハイキング、パラオ大統領へのインタビュー、日本のODAの成果など、観光では体験できないことをたくさん体験することができ、大変貴重な時間になりました。

日本のODAで作られた学習机や椅子など

中林　紀子
(文学部　英語英米文学科　2年次生)

海外体験学習プログラムを通じて、グアムとパラオの政府や観光局などの訪問で、特に印象に残ったのは、脱植民地委員会局長のエドワード・アルバレスさんとパラオの大統領であるレメンゲサウ大統領のインタビューで、経済状況や日本との関わり、観光業について、環境保護について聞いたことです。パラオでもグアムと同様に観光局訪問をし、そこで印象に残っているのは観光局の方たちは「パラオの財産はこの美しい自然であり、今後極端な発展は望んでいない。」とおっしゃっていたことです。観光で利益を上げるために自然を犠牲にして近代化を進めるのではなく、何よりも一番に自然を大事にするという姿勢に驚き非常にすばらしいと感



グアムのイパオビーチでのゴミ拾いの清掃活動ボランティア

じました。グアム大学、Palau community collegeの学生との交流では、日本の大学よりもかなり幅の広い年齢層で驚きました。みんな勉強熱心な学生ばかりで感心しました。

前田　夏奈子
(経済学部　2年次生)

日本との関係が根強いグアム、パラオ。環境保護に積極的であり素晴らしい自然を誇っている。また主要産業が観光業といわれるほど観光業が盛んであり、日本人が多く訪れる場所でもあり2つの島は共通していることが多い。リゾート地として華やかな街に見られるが、現地の人々からすると全く異なる街である。米国からの支配が強く、経済的にも政治的にも多くの問題を抱えている。

2つの島の現状や経済状況について、国や州のトップの方との意見交換から様々な島の姿が見えてきた。米国から戦後支配されてきた双方であるが、パラオは独立に成功し、グアムは未だ米国の自治属領地とされている。独立から何を目指すのか。また独立による利益や影響は何であるのか。貴重な意見をたくさん聞くことができ、島の姿を見ることができた。

グアム政府脱植民地化委員会事務局長との意見交換

○海外体験学習プログラム／タイ王国【夏季】

■参加学生	
赤本　真美（経営学部　経営学科　3年次生）	伊藤　宏樹（経済学部　国際経済学科　3年次生）
定藤　　恵（社会学部　臨床福祉学科　1年次生）	曽我　夏希（理工学部　環境ソリューション工学科　1年次生）
高尾　桃子（国際文化学部　国際文化学科　1年次生）	野木　悠紀（社会学部　臨床福祉学科　3年次生）
安江　彩夏（社会学部　地域福祉学科　1年次生）	山本冨美子（文学部　哲学科　2年次生）
■企画団体、テーマ	
特定非営利活動法人　Link・森と水と人をつなぐ会 「森にくらす人々と過ごす一週間　～北タイのくらし、村の知恵に学ぶ～」	

■行　程

日　程	場　所	時　間	活動内容
9月2日（月）	関西国際空港 バンコク チェンマイ	11：45 15：35 17：20 18：30	集合、タイ航空にて空路バンコクへ バンコク着 空路チェンマイへ チェンマイ着、ホテルへ移動　【チェンマイ泊】
9月3日（火）	ホアファイ村	終日	チェンマイ市内からホアファイ村へ陸路移動 大自然の中で森とくらしを守ろうとする人々や、それを支援するLinkの活動について、現場で見て聞いて共に考える　【ホームステイ】
9月4日（水）	ホアファイ村	終日	村人と共に森や畑から食材を調達し、一日かけてディナーを作るプロジェクト、通称“ディナプロ”を実施　【ホームステイ】
9月5日（木）	ホアファイ村	終日	ホームステイ先の少数民族パカニョーの文化にたっぷりと浸る　織物体験等　【ホームステイ】
9月6日（金）	ホアファイ村 チェンライ	終日	タイ・ビルマ・ラオス国境へ さまざまな民族の村を抜けてチェンライへ陸路移動　【Moon & Sun Hotel 泊】
9月7日（土）	チェンマイ バンコク	 19：20 20：30 23：30	ワットロンクンを見学後、チェンマイ市へ移動 ツアー全体の振り返り、まとめ 夕食後、チェンマイ空港へ チェンマイ発 バンコク着 バンコク発　空路関西空港へ　【機中泊】
9月8日（日）	関西国際空港	7：00	関西空港着、解散

赤本　真美
（経営学部　経営学科　3年次生）

この海外体験学習プログラムでは、北タイの文化に存分に浸ることができた。中でも、ディナープロジェクトやホームステイでの生活から、自然との共生の大変さ、重要さを感じることができ、またホームステイ先で生活をしていく中で、日本での生活を客観的な視点から考えることもできた。そのことにより、環境問題に対する姿勢もより自分に近いものとなったように感じる。村人たちは決して楽ではない生活であるはずなのに迎え入れてくれ、ホームステイで不自由さは何一つ感じることがなかった。彼らの文化を守りつつも経済的にもう少し余裕のある生活を送ってほしいという思いが強くなったと同時に、村での体験を通して、

ホイポン集落でのディナープロジェクトの様子

多少ではあるが、その思いを村人のニーズに近いものに具体化できたのではないかと思う。

伊藤　宏樹
(経済学部　国際経済学科　3年次生)

何が正しいかはわからない。しかし、今の日本の文化に危機感を持ったのは事実だ。

私は今まで鶏を食べてきた。だが、生きている鶏を殺し、毛を抜き、食べられる状態にしたことは今まで一度もなかった。実際体験したことはあまりにもショックであり想像以上だったのだ。しかし、生きていた新鮮な食材をすぐに食べられることや、自給自足の食生活に魅力を感じるようになったのも事実である。人間本来の姿が「幸福」であると感じたのかもしれない。日本が昔感じていた「幸福」を体験できたのは、とてもよかった。そして、現在感じている「幸福」の常識との違いを今回のホームステイを通して経験した。私にも正解はわからない。一見無駄のない効率的な社会である日本。しかし、その日本で当たり前と考えられている「幸福」の思想は、必ずしも正解ではなかった。このことに気づけたことが、最大の学びであったと感じる。

精米しているところ

定藤　恵
(社会学部　臨床福祉学科　1年次生)

私がタイで印象に残ったことの中から、いくつか主なものを紹介します。タイと日本の生活で大きく違うところは、物質的なものだけでした。タイの人々の心の中には、仏教的な思想に基づいた心の豊かさがあったと思います。お金や時間にとらわれることなく、早寝早起きの規則正しい生活をして、自分たちの食料は自分たちで手に入れ、村人全員で田植え・稲刈りをして、雨が降れば家の中で機織りをし、一緒にご飯を食べる。それが一番人らしい生活なのだと思いました。必要以上に利益を求めない生活の仕方は、どんな先進国よりも、最先端の生き方のように感じます。しかし、私自身も心の持ち方で、日本でも同じように豊かな生活が送れると思いました。物質的なものに頼るのではなく、人とのつながりを一番に考えて生活すれば、もっと心豊かに充実した生活を送れるのではないかと思います。

自給自足ということで鶏を自分たちが食べられる状態にする

曽我　夏希
(理工学部　環境ソリューション工学科　1年次生)

私はタイという国は、笑顔が多くて優しい国だというイメージを持っていました。そのイメージは正しかったと、ホームステイ先の村で分かりました。ホイポン村にホームステイをした時、初めて会っても笑顔で挨拶をしてくれる人がたくさんいました。ホームステイ先でも、言葉がほとんど通じない私に、本を見ながら一生懸命会話をしようと努力してくれました。

村に滞在して一番驚いたことは、村全体が家族のように付き合っているということです。それは日本の田舎の様ですが、私のイメージする日本の田舎の人付き合いではありませんでした。ホームステイをしていると、私が泊まっている家の家族ではない人が家の中に普通に座って話をしています。

日本とは全く違う場所に来たと実感しましたが、違いだけを感じたわけではありません。主食としている米は日本と同じうるち米でした。

子どもたちの笑顔も日本と同じでした。

精米をした後、白米以外を下に落としているところ
ぬかは後で豚や鶏の餌になる

高尾　桃子
（国際文化学部　国際文化学科　１年次生）

ホームステイでは、言葉がわからなくても、伝えようとする気持ち、相手を理解しようとする気持ちがあれば通じ合えるのだということを実感した。また、村人たちの暮らしを見て感じたことは、村の人たちの生活に“貧困”という言葉は合わないということだ。なぜなら、美しい自然に恵まれ、そこに生きる人々はいつも笑顔で前向きで、貧しさ故に困っているようには見えなかったからだ。ものや最新の技術がないことが、貧しい、かわいそうということには決して結びつかないのだと思った。ディナープロジェクトでは、森から食材を調達することから始まり、一日かけてその日のご飯を作った。村人たちの生活が、いかに自然と強く結びついているかを体験した。

このスタディツアーを通して、村人たちのように、相手の違いを受け入れること、周りの人とのつながりを大切にすること、そして、今の生活の中に幸せを見出すことが、平和につながるのではないかと思った。

お菓子作りに使うココナッツの中身を削っているところ

野木　悠紀
（社会学部　臨床福祉学科　３年次生）

北タイのホームステイを通して、家族間や地域間の繋がりを学びたいと思っていた。まるで村全体が一つの親戚のようで、お互いがお互いを支え合いながら、暮らしていた。これは、過疎化が進む日本でも、昔はみられた光景である。タイの村はお湯も出ないし、道も砂利道である。しかしその村でも日本と同じように子どもたちは笑い、森に行けば豊富に食料もある。日本よりも経済的に厳しいはずなのに、幸福度は高い状況だった。

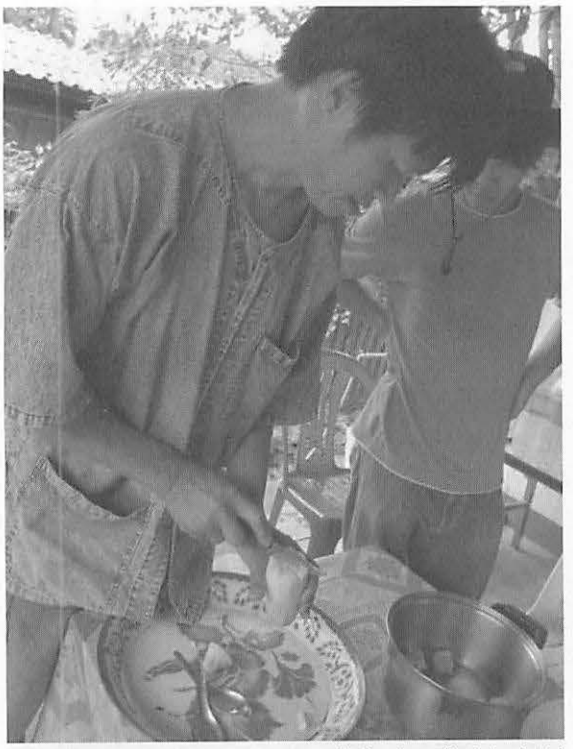
日本は、タイの森の木々を多く輸入し無駄に多く消費している。今回訪れた村人が毎日生きるために共に共生している森を、私たちは少しずつ削っていたのだ。日本人は国外の自然に多く支えられて今の生活の質を保っている。私達は、リデュース（無駄を無くし、必要以上の生産や消費を防ぐ）精神で生活していくことが大切であると気づかされた。自然を壊すことは簡単だが、取り戻すのは難しいということを理解していかなければならない。

村人に教えてもらいながら機織りでコースターを作っている。
村に住む女性の現金収入の一つである

安江　彩夏
（社会学部　地域福祉学科１年次生）

私が今回のツアーに参加した目的は、主に２つある。１つ目は、ここで学んだ経験を今自分が携わっている子どもたちに伝えること。そして私は福祉に興味を持っているため、プログラムの中のホームステイなどから、家族の在り方、人々のつながりを学ぶことであった。

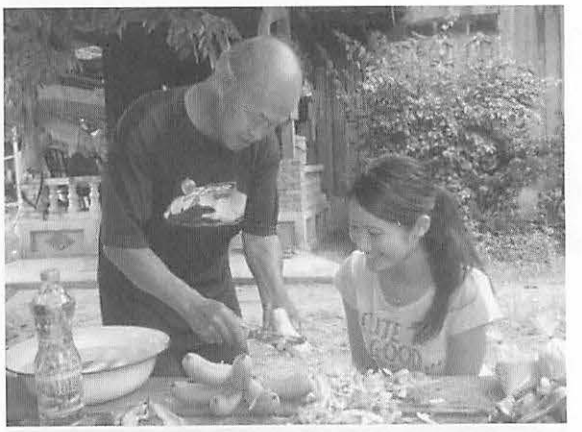
実際、目に見えるように伝わってくる強くて固い人と人とのつながり、また人と人だけでなく森や動物たちも含め村全体のつながりを感じることができた。その他にも、森が壊れていくメカニズム、自然災害との関係性、森を守るために命がけで活動した人々の努力、そして森を守らなければならない大切さ、森と共に生きるということ、自分たちの生活とはまるで違う人々の暮らし、そこで暮らす人々の笑顔と温かさ、ここでの経験は自分の中で最高のものとなった。今回のプログラム参加において協力してくださった全ての人たち、また一緒に素晴らしい体験をした仲間に感謝したい。



村人と共に食料を調達、調理をする「ディナープロジェクト」で村人から料理を教わっているところ

山本　富美子
（文学部　哲学科　２年次生）

私は貧困地とは、お金はもちろん食べ物や電気もなく苦しい生活をしているイメージを少なからず持っていた。しかし、今回ホイポン集落でのホームステイにより感じたこと、それは笑顔と活気に溢れた生活をしていたということである。確かに収入はほとんどなく、お金は一般的に少ないと言えるかもしれない。だが、村人たちは、常に笑顔で村全体が一つの家族のように助け、支え合い、自然に溢れた環境を守り、資源を無駄にすることなく生活をしていた。誰ひとり苦しそうな顔を見せず、村人たちの強い繋がりが目に見えるほど実感できた。本当にここが貧困地なのか。とても私には理解できず、むしろ技術だけが発展していき資源を無駄にしたり、人間関係が希薄になってきたりしている今の世の中が、最も理想とすべき姿なのではないかと感じた。貧困とは何か、改めて難しい問題だと感じたが、答えを探していくのと同時にたくさんの貴重な経験ができたことに改めて感謝したい。



村人と一緒にバナナを揚げたお菓子を作っているところ

○海外体験学習プログラム／フィリピン共和国【春季】

■参加学生	
河野　遥香（国際文化学部　国際文化学科　1年次生）	高岡　　愛（社会学部　臨床福祉学科　1年次生）
長江　健太（経済学部　国際経済学科　2年次生）	藤代　志保（国際文化学部　国際文化学科　1年次生）
星野　智子（政策学部　政策学科　2年次生）	圓山　信世（社会学部　地域福祉学科　3年次生）
村上　桃子（社会学部　社会学科　2年次生）	若林　美帆（社会学部　社会学科　2年次生）
■引率教員、テーマ	
笠井　賢紀　講師（社会学部）「フィリピンで学ぶピープル・パワー」	

■行　程

日　程	場　所	時　間	活動内容
3月5日（水）	関西国際空港 マニラ市着 ケソン市	09：55 13：20	集合、空路へ ニノイ・アキノ国際空港着、ホテルへ フィリピン大学ディリマン校散策　【ケソン市泊】
3月6日（木）	ケソン市	午前 午後	ケソン市役所コミュニティ関連局訪問 ケソン市バランガイ・タラヤン、バランガイ・タタロン散策（スラムでの生活） 自治体首長インタビュー（バタンガイ・タラヤン、バランガイ・サントドミンゴ）　【ケソン市泊】
3月7日（金）	ケソン市 マカティ市	午前 午後	バランガイ・パヤタスの学校パアララン・パンタオ訪問 マカティ（商業地区）の視察、社会的企業ユニカセ訪問 【マカティ市泊】
3月8日（土）	マカティ市 バレール町	午前 午後	オーロラ州バレール町へ移動 バレール教会訪問、教会附属のカレッジで授業聴講 【バレール市泊】
3月9日（日）	バレール町	終日	バレール市でキリスト教組織訪問（教会とバランガイ・ザバリ、バランガイ・ピギンの戸別訪問インタビュー） 【バレール市泊】
3月10日（月）	バレール町 マニラ市	午前 午後	オーロラ州知事表敬訪問 マニラ市へ移動　【マニラ市泊】
3月11日（火）	マニラ市	午前 午後	イントラムロスで歴史学習（サンチャゴ要塞、サンアグスティン大聖堂など） サントトマス大学訪問　【マニラ市泊】
3月12日（水）	マニラ市発 関西国際空港	12：35 14：35 19：20	ニノイ・アキノ国際空港着 フィリピン航空にて関空へ 関西空港着、解散

※バランガイはフィリピンの基礎自治体で市または町の下に位置する

河野　遥香
(国際文化学部　国際文化学科　1年次生)

今回の海外体験学習プログラムで出会った人たちの中で特に印象的であったのが、タタロンのエリアコーディネーターであるミリンさんと、ユニカセのジェネラルマネージャーを務めていらっしゃる中村八千代さんだ。このお二人には共通する部分がある。それは「出会った人、一人一人にきちんと向きあって、話を聞く」ということである。話を聞くことで信頼関係が生まれ、深いつながりが生まれ、つながった人たちが皆、笑顔になる、そんな風に感じた。また、信頼関係を築くことの難しさを学ぶと同時に、そこにはフィリピンの人たちのパワーが詰まっていると感じた。今回の体験学習でたくさんの人たちとの「奇跡」と言える出会い、つながりの中に自分たちもいるということを感じ、このつながりをこれからも大事にしていきたい。

ミリンさんにタタロンを案内していただいているところ

高岡　愛
(社会学部　臨床福祉学科　1年次生)

「貧困問題」「スラム街」…テレビの映像でしか見たことのない、ましてフィリピンが大きな貧困問題を抱えていることすらほとんど知らなかった私にとって、この海外体験学習プログラムは本当に貴重な経験になりました。普通の旅行では行くことのない場所にたくさん行かせてもらい、様々な景色を見て、たくさんの人と交流することが出来ました。フィリピンの富裕層と貧困層の生活のギャップは想像以上に大きく、見てすぐ分かるものでした。貧困層区域の散策はとても印象に残っています。お金になるゴミとそうでないゴミを分別している人、町で売るための商品を作っている人、それぞれが明日を生きるために強く生きていることを学びました。また、区域住民同士が家族の枠を超えて支え合いながら生活している姿や区域住民と行政の良い関係性を知り、人と人との繋がりがそこで懸命に生きる人たちの生活を支えているように感じました。

この海外体験学習プログラムで学んだことを一人でも多くの人に伝えていきたいです。

花飾りをつくる女性たちとの交流の様子

長江　健太
(経済学部　国際経済学科　2年次生)

今回のフィリピンでの8日間は、そこで暮らす人たちのライフスタイルに着目した。

都市部では富裕層と貧困層が共存していた。裕福な家庭で暮らす人々は自分の家の塀を高く設置し、お手伝いさんを雇い、自家用車を所有している。その一方で、そうした富裕層の住む地域を一歩出ると、スラムと呼ばれる貧困層が居住する過密化した地区がある。富裕層と貧困層間のライフスタイルのギャップは一目瞭然であり、同じ国、同じ地域内でもここまで違うものかと驚愕した。また、そのライフスタイルのギャップを縮めるために尽力されている方々がたくさんいるということも知った。

今回の旅全体を通して感じたのは、そこに住

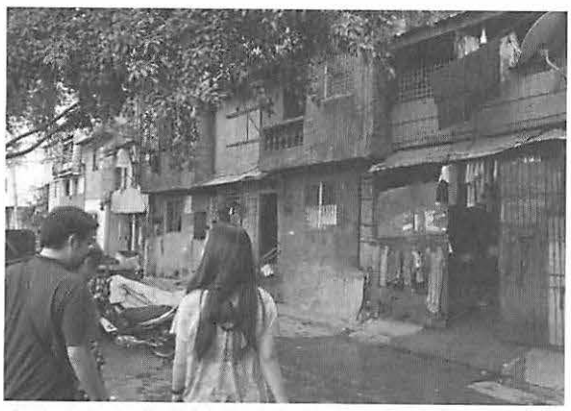
バランガイタタロンを散策中、CROのミリンさんが現地の方と会話している様子

む人々の“ホスピタリティ”、そして“ピープル・パワー”である。訪れる先々で出会う方は皆親切に対応して下さり質疑応答もしやすかった。また、貧困などの諸問題に真摯に向かい合い、その改善に尽力される方々の姿はとても印象的だった。

藤代　志保
（国際文化学部　国際文化学科　１年次生）

大学に入学する前から、ドキュメント番組で家族のために働き、学校に通っていない、自分よりもはるかに若い子どもたちがいることを知ったのが始まりで、貧困の問題に興味を持ち、大学に進学してからはテレビで見るだけではなく、実際に貧困の問題を抱える国を訪れようと決めていた。

この海外体験学習プログラムでゴミ山付近の学校、スラム街、田舎町などフィリピンの様々な場所を訪れ、自分がフィリピンに住む貧困層の方々に何もすることができないということを痛感し、ショックを受けた。しかし、その中で小さなことでも何か出来ることがあるならばしたい。その「何か」を考えることが次の課題である。学校に通えていること、生活をするのにお金に困っていないことなど、今までも当たり前ではないと分かっていたが、フィリピンで実際に多くの方々にお会いし、話すことで今の自分の状況が当たり前ではないということを再認識することができ、私に今できることを精一杯しようと思う事が出来た。



貧困層の人々の暮らしを視察するためにタタロンを訪れ、解説を聞いている様子

星野　智子
（政策学部　政策学科　２年次生）

フィリピンの「ピープル・パワー」という言葉に興味を持ち、参加を決めた海外体験学習プログラムだったが、現地の人々、１人１人の考え方や生き方に心を動かされる１週間だった。首都圏の大きな組織から、そうでない小さな基礎自治体レベルの住民組織までを訪れ、行く先々で人々のライフスタイルの違いや、考え方の違いを学んだ。「発展途上国」を一元的な見方しかできていなかった自分にとって、実際にそこで暮らす人々と直接会話をし、コミュニケーションを取れたことはとても貴重な経験だった。ありきたりなのかもしれないが、自分の中での「発展途上国」のイメージは大きく変わったと言える。出会った人々は皆、過去の自分に起こった様々な苦難を乗り越えて、今と向き合っていた。誰もが前向きな考えを持っていて、今後この国がどのように変わっていくのか、その過程で自分は日本人として何ができるのかを考え続けたいと思う。

タラヤンバランガイの視察

圓山　信世
（社会学部　地域福祉学科　３年次生）

春季海外体験学習プログラムに参加し、「フィリピンで学ぶピープル・パワー」というテーマで３月５日から３月12日の旅程でフィリピンのマニラ首都圏、オーロラ州バレール町へ行った。フィリピンでピープル・パワーというと、1986年のアキノ政権樹立にいたる４日間の出来事を指す「ピープル・パワー革命」が出てくる。ピープル・パワー革命やスペイン植民地時代などフィリピンの歴史や文化について学んだのはもちろんのこと、スラムや商業地区、農村、漁村、市役所などいろいろな場所を見学・訪問する中でフィリピンに住む人々の力強さを学んだ旅でもあった。プログラムの中で特にマニラ首都圏内で訪問したケソン市役所で聞いた反貧困事業の話とフィリピンと日本の食事の違いが印象に

残っている。

ケソン市役所にてCROの職員の方からプレゼンテーションを受けている様子

村上　桃子
（社会学部　社会学科　２年次生）

フィリピンで過ごした８日間はとても充実した素晴らしい日々だった。多くのコミュニティを訪問した中で、そこで暮らす人たちは貧困層と呼ばれるような生活を送っていても、誇りを失わずに日々を懸命に生きていることを知った。支援をする人たちもただ助けるだけでなく、その人たち自身で生きていくための支援を行っていて、尊厳を持つことの大切さを学んだ。一人一人が自ら動こうとする意志があったからこそ、フィリピンは大きな革命を起こすことができたのだろうと実感した。同じフィリピンの中でも住んでいる土地や信じている宗派等によってさまざまな違いがある。色々な暮らしを見てきて、やはりみんな自らのことや家族、住んでいる土地等に何かしらの誇りを持っているんだと感じた。

オーロラ州知事から額縁等の説明を受けている時の様子

若林　美帆
（社会学部　社会学科　２年次生）

フィリピンでの海外体験学習は、貴重な出会いと経験ばかりだった。１日１日が充実しており、毎日多くのことを学び、濃密な時間を過ごした。

私たちは、フィリピン滞在３日目にケソン市のパヤタスにある学校、パアラランパンタオを訪れた。パヤタスには産業廃棄物処理場・ごみ山がある。私たちは子ども達の活動に参加したり、日本の手遊び歌を教えたりして交流した。パアラランパンタオの校長・レティさんにお話を伺い、フィリピンにおける学位と貧困の関係を学んだ。

また、こうした貧しい地域・家庭で育った青少年の雇用を創出し、自立を促すためにマニラで社会的企業「ユニカセ」を経営している中村八千代さんという日本人女性のお話を伺うことが出来た。

人との出会いから多くのことを学んだ８日間だった。多くの出会いに感謝し、この体験学習で学んだことを今後にいかしたい。

子ども達に日本の手遊び歌「アルプス一万尺」を教えている

引率教員講評
笠井　賢紀　（社会学部　講師）

「ピープル・パワー」とは1986年のマルコス独裁政権崩壊を導いたエドサ革命での人民の力を表すものであった。ここで「人民」と書いたように、国家レベルの政治に関する言葉として理解されやすい。だが、今回の海外体験学習は歴史的ことがらとしてのピープル・パワーではなく、今まさに生活している人びとの力を学ぶ旅である。今回の旅ではオーロラ州知事や複数のバランガイ・キャプテン（村長）、そしてカトリック司教が私たちに応じてくれたが、そうした政治・宗教的に地位のある方たちだけから学ぶのではない。ごみ拾いで生計を立てている人、土地の所有権が不確かな場所で暮らす人、

過去に罪を犯してしまった人、そうした方たちと直に接して学びを得る旅である。

ボランティア・NPO活動センター主催でありながら、いわゆるボランティア活動は組み込まなかった。社会に対してボランタリーに何かをするとはどういうことなのか、それもやはり人々から学生は学べると考えたからだ。単発のボランティア活動は参加者にかりそめの高い充実感を与えるがそれ以上でもそれ以下でもない。旅で達成感を感じるよりも、一定の無力感を感じるのが自然である。悩んだり動いたりしながら、その苦しみを乗り越えようとする気づきと機会こそが体験学習で提供されるものである。

簡単に旅程を振り返る。最初の3日間は、首都圏で富裕層と貧困層の格差を目の当たりにする日々だった。首長や行政職員の話を聞いた上で地域を歩いて回り、さまざまな生業や不安定な住環境についても学んだ。「明るい笑顔」や「貧しくても頑張って生きる人」と美化するだけではどうしようもない現実を見た。中盤の3日間は農山漁村が広がるオーロラ州の州都バレール町に滞在した。ここでは宗教の力に触れた。首都圏に戻ってからはイントラムロスを訪問しフィリピンの歴史を学んだ。それにしてもこの8日間、私たちを歓待し案内してくれた人、地域で活躍している人たちの大半が女性だった。参加学生8名のうち7名が女性であり、彼女たちにとっては「活躍する女性」像として、また違った視点で見られたことだろう。

今回参加した8名の学生たちは、いずれも体調不良になることもなく最終日まで心身ともに健康だった。道中での意欲も極めて高く、質疑応答や会食の際には多くの素朴な疑問や気づきについて話が展開された。いわゆる「英語力」よりも、さまざまな社会状況に関する知識や、人の生活や思いを想像できる経験こそが重要であることにも気がついたようだ。知識・経験は一日に得られるものではなく、継続的な獲得のためには動機付けが必要になる。「日常」に引き戻された学生たちのすべてに今回の体験学習による動機付けがすぐに働くとは期待していないが、決して焦る必要は無い。10年後、20年後に今日の経験が生きてくることもあるだろう。学生だからこそできることもあれば、学生ではできないこともたくさんある。

参加学生たちには、人びとの生活をあまり美しく語りすぎないでほしい。「貧しくても頑張っている」と語る前に、なぜ貧しいのか、なぜ頑張らなければならないのか、大学という学問の府にいる者として、そうした疑問から初めてほしい。とはいえ、人を動かすのはデータや論理だけではない。現場を歩き、現場で語らったからこそ感じられたことを今回の旅に参加できなかった友だちや家族にどんどん伝えてほしい。伝えることも、急に訪れた私たちを溢れるばかりのホスピタリティで迎えてくれたフィリピンの人たちの恩に報いるための、重要な一つの方法だ。そしてもし、一歩進んで、またフィリピンに行きたい、またこの旅の仲間で何かしてみたいというときは、微力ながら引率の責を負った者として支えたいので気軽に声を掛けてほしい。

フィリピン滞在最後の夜、お揃いのお土産を手に

○海外体験学習プログラム／カンボジア王国【春季】

■参加学生	
粟津　涼平（経済学部　国際経済学科　2年次生）	江夏広太郎（文学部　仏教学科　4年次生）
川崎　愛実（文学部　英語英米文学科　2年次生）	木村　大海（理工学部　電子情報学科　1年次生）
古川　貴樹（経済学部　国際経済学科　2年次生）	牧　　美里（社会学部　社会学科　1年次生）
依田　匡史（法学部　法律学科　1年次生）	
■企画団体、テーマ	
特定非営利活動法人　テラ・ルネッサンス　「地雷畑から『平和』を考える」	

■行　程

日　程	場　所	時　間	活動内容
3月2日（日）	関西国際空港 ホーチミン着 ホーチミン発 プノンペン	08：00 14：10 16：15 17：00	集合 着後、ホテルへ　【プノンペン泊】
3月3日（月）		午前 午後	カンボジア義肢装具士養成学校訪問、旧ゴミの山の近くにあるVCAO運営小学校訪問 キエンクリエン車椅子工房見学　【プノンペン泊】
3月4日（火）	プノンペン バッタンバン	午前 午後	キリング・フィールド見学 トゥールスレン博物館見学 バッタンバンへ移動　【バッタンバン泊】
3月5日（水）	パイリン	午前 午後	MAG不発弾撤去現場見学 村落開発支援ロカブッス村訪問・交流　【パイリン泊】
3月6日（木）	バッタンバン	午前 午後	村落開発支援プレア・プット村訪問・交流 ピースフルチルドレンホームⅡ（孤児院）訪問・宿泊 【バッタンバン泊】
3月7日（金）	バッタンバン シェムリアップ	午前 午後	MAGバッタンバン事務所、テラ・ルネッサンス事務所訪問 シェムリアップへ移動 希望小学校訪問、アプサラダンス観賞、ナイトマーケット散策　【シェムリアップ泊】
3月8日（土）	シェムリアップ発 ホーチミン着	午前 午後 21：10 22：10	アンコールトムとタ・プロム遺跡観光 アンコールワット遺跡観光後、空港へ移動　【機中泊】
3月9日（日）	ホーチミン発 関西国際空港着	00：10 07：00	 関西空港着、解散

粟津　涼平
(経済学部　国際経済学科　２年次生)

私はカンボジアでのスタディツアーで多くの事を学んだ。その中でも印象的であるのは、地雷が生み出す貧困問題である。カンボジアで多くの地雷の被害者に会い、その中には地雷によって片足を失い被害前より貧しい生活を余儀なくされている家庭や、過去に地雷の被害にあいながらも地雷撤去をされている方など様々であった。家族を養うために、地雷が埋まっていると知りながらも農地を開墾しなければならない状況など、カンボジアで多くの不条理を目の当たりにし、大きな衝撃を受け自分の無力さに憤りを感じた。そして地雷撤去の現場では、地雷撤去の難しさや、常に恐怖と隣り合わせの仕事であることなど地雷撤去の作業員の方が語ってくださった。地雷の怖さが作業員の方へのインタビューを通して伝わってきた。

私はこのスタディツアーで見たもの聞いたもの感じたものを一人でも多くの人に伝えていきたい。この伝える事こそがスタディツアーに参加した私たちの義務であると強く思う。

どくろが描かれた地雷区域を示す看板

江夏　広太郎
(文学部　仏教学科　４年次生)

地雷問題以外にも、小学校や孤児院を訪問させて頂き子ども達との交流を楽しんだり、ポルポト政権時代に大量虐殺が行われたキリングフィールドの見学などで五感をフル活用しながら本当に多くのことを学ばせて頂きました。私はあまりに多くのことを学び、カンボジアが抱えている大きな問題を自分の肌で実感したことで、自分の頭の中で整理しきれずに、考えても考えても良い答えが思い浮かばず、しんどくなることもありましたが、毎晩行われた夜のミーティングで、参加者一人一人の熱い思いを全員で共有出来たことで、他の人の考え方を知り、良い刺激を受けることができ、新しい価値観も生まれました。

今回の海外体験学習プログラムで学ばせて頂いたことを日本で多くの人に伝え、カンボジアの全ての人々が安心して暮らせるように日本でも出来る支援を続けていきたいと強く思います。今回の海外体験学習プログラムはテラ・ルネッサンス様を始め、多くの方々の支えによって無事に終えることが出来ました。このような貴重な学びの場を提供して頂き、本当にありがとうございました。

小学校で文房具の贈呈式を行った時の写真

川崎　愛実
(文学部　英語英米文学科　２年次生)

私が今回この海外体験学習プログラムに参加しようと思ったのは、様々な体験をして視野を広げたいという漠然としたものだったが、実際に参加してみるとカンボジアの方のひたむきさ、暗い過去と現実に直に触れて感じるものが多くあったツアーであった。

特に地雷問題に関しては考えさせられることが多かった。死と隣り合わせで体力的にも厳しい仕事、気が遠くなるような作業、自分の体を持って感じ、初めて彼らがしていることがどれだけすごいことなのか、そしてこういった作業する人がいるからこそ安全に生活が送れるということを深く実感した。また、地雷撤去には海外からの支援や援助が必要であるが年々それは減ってきているという。地雷問題はカンボジアや埋まっている土地だけの問題ではなく、繰り返してはいけない過ちとしてすべての人が考えていかなくてはならない問題である。今回、学び感じたことを自分の中にとどめるのではなく、周りの人たちにカンボジアが今どういった

問題に直面しているかを伝えることは、私たちにもできることであると思う。

今回のツアーは自分にとって一生に残るものとなった。自分が初めに抱いていたカンボジアのイメージとは全く違い、現地へ行って自分が体験することが一番の学び方であると感じた。カンボジアで学び感じたことをこれからの自分の生活に活かしていきたい。

ロカブッス村の小学生たちと遊んでいるところ

木村　大海
(理工学部　電子情報学科　1年次生)

カンボジアは初め想像していたのとは一つ一つの重みが全く違っていて、実際に現地に行ってみないと分からないことがとても多いことを身をもって経験しました。特に地雷原では地雷の生の音や埋まっている光景を目にして初めて本当の恐怖心が分かると感じました。

つい30年ほど前に起こったポルポト政権の大量虐殺も、まだ生存者がいて、本当にあった出来事を直接聞くことができ、二度としてはいけない過ちであるという思いが心の底から込み上げてきました。

実際に行ったのと行っていないのでは、感じ方や気持ちの持ち方が全く変わってくると思いました。少しでも相手に行ったように感じてもらえるような話し方で、多くの人に関心を持ってもらいたいと思いました。

地雷原に実際に入る体験をしているところ

古川　貴樹
(経済学部　国際経済学科　2年次生)

僕はスタディツアーに参加して自分の人生の中で最も貴重な体験ができました。カンボジアは自分の想像していた途上国とは大きく違っていました。背景に様々な問題を抱えている人を見てきたものの、みんな笑顔で優しかったのが印象的です。カンボジアの子どもの笑顔は世界一輝いていると思いました。

このツアーではカンボジアの影の部分も多く学びました。ポルポトによる大虐殺が行われたキリングフィールドや地雷撤去団体のMAGも訪れました。教科書では数行でしか書かれない出来事を目の当たりにして悲しくなりました。また地雷撤去の地道な作業や日中40℃を超す天候の中で危険と隣り合わせに仕事をしている作業員の姿を見て多くのことを考えさせられました。

この海外体験学習プログラムに参加して支援の仕方の難しさを痛感しました。様々な人に出会い、様々な価値観を共有できたことは大きな刺激になりました。今後この経験を活かせるように大学生活を過ごしていきたいです。

実際に過去に見つかった地雷の解説を聞いている様子

牧　美里
(社会学部　社会学科　1年次生)

私が7泊8日の海外体験学習プログラムで受けた衝撃はあまりにも強く、帰国した今もカンボジアのことばかり考えています。今回のツアーでは、歴史的・文化的視点からカンボジアの過去をみました。今を生きる様々な世代の人々からカンボジアの現在について聞きました。そして、微量ながらも、確実に技術面や安

全面で進歩してきているというカンボジアの未来を知りました。地雷や貧困という生死に関わる問題を抱えながらもなお、キラキラとした笑顔を向けてくれたカンボジアの人々からは、生命力の強さを感じました。

今回のツアーでは、決して観光では見ることのできなかったカンボジアの裏側まで知ることができました。カンボジアで私が見たもの、聞いたこと、行ったところ、体験した全てがとにかく衝撃的で、正直かなりショックでしたが、カンボジアのさらなる発展を願って、これから日本人として、私にできることをしていきたいと思います。

クメール語で自己紹介をしているところ

依田　匡史
（法学部　法律学科　1年次生）

私はこの一週間の海外体験学習プログラムで、本当に多くの学びや出会い、そして感情を経験することができました。今だに、あの場での思いや葛藤が、頭の中で錯綜しています。今回は、私の得てきたものの、ほんの少ししか紹介できませんが、報告します

今回テラ・ルネッサンスが支援している小学校などをいくつか訪問しました。どの小学校でも、突然来た言葉も通じない私たちを何のためらいもなく笑顔で迎えてくれて一緒に遊んでくれました。子ども達、一人一人の笑顔が真っ直ぐで本当に素敵でした。しかし制服がない子や汚れていたり、破れたりしている子どももいました。そして一番衝撃を受けたのは、「子ども達の中には、髪を染めている子もいるんだな。」と思っていたら、その後の夜のミーティングで、それは栄養失調により髪の色素が薄くなってしまっているのが、原因と知った時です。「オシャレだな。」と、少しでも思っていた自分が恥ずかしく、胸が締めつけられ「世界の不平等さ」を強く感じました。

それでもこのカンボジアには、笑顔が溢れていました。子ども達だけでなく、カンボジアの人みんなの笑顔がありました。「本当の幸せって何だろう。」今回カンボジアへ行って、一番思いました。考えても考えても、まだ答えにたどり着けていません。

私は人生で初めて、こんなにも多くのことを学び、多くの人と出会い、様々な感情を経験できました。現地に行かなければ見えない、わからないことがあると本当に感じました。

鉛筆を渡した後、オークン（ありがとう）と言われた時の写真

企画名	体験学習プログラム報告会
日　時	2012年度　春季：2013年　4月22日（月）17時30分～19時00分 2013年度　夏季：2013年　10月15日（火）17時30分～19時10分 2013年度　春季：2014年　4月24日（木）17時30分～19時15分
場　所	2012年度　春季：瀬田キャンパス　3号館105教室 2013年度　夏季：深草キャンパス　21号館101教室 2013年度　春季：瀬田キャンパス　6号館プレゼンテーション室
実施主体	ボランティア・NPO活動センター
参加人数	2012年度春季：約70名、2013年度夏季：約50名、2013年度春季：64名

■経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環として報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、誰でも報告を聴ける形で実施しました。

■概　要

参加した学生が、プログラムごとに、プログラムでの体験を通じて学んだことをそれぞれのスタイルで報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、受け入れ先（スタディツアー企画団体）のNPOの方にも参加いただきました。発表概要は下記表の通りです。

	訪問地・発表者人数	テーマ
2012年度春季	タイ王国 プログラム参加者 12名	「タイの最貧地イサンでのムラおこしと生活」
	フィリピン共和国 プログラム参加者 4名	「山岳部のしょうがい児・者の暮らしとコミュニティ・ケアを学ぶ」
	沖縄県中南部地域 プログラム参加者 10名	「平和と多文化共生について学ぶ」
2013年度夏季	アメリカ合衆国（グアム）・パラオ共和国 プログラム参加者7名	「島嶼社会における自立と共生を考える」
	タイ王国 プログラム参加者 8名	「森にくらす人々と過ごす一週間～北タイのくらし、村の知恵に学ぶ～」
	京都府宮津市 プログラム参加者 16名	公園を拠点としたまちづくりデザイン ～市民による公園作りからまなぶこと～
2013年度春季	フィリピン共和国 プログラム参加者 8名	「フィリピンで学ぶピープルパワー」
	カンボジア王国 プログラム参加者 7名	「地雷畑で『平和』を学ぶ」
	鳥取県智頭町 プログラム参加者 15名	「過疎の山村再生と、魅力的なまちづくりを学ぶ」

■コーディネーター所感

体験学習プログラムに参加した学生達は、報告会に向けて同じプログラムに参加した学生同士で発表をまとめることによって、体験を通して自分達が感じたことを改めて共有し、より学びを深めることができています。参加後も継続して学び続けたり、行動し続けたりしてほしいと思います。

また、体験学習プログラムへの関心をより広げるためにも、報告者以外の参加学生数が増加するよう、本報告会の広報に力を入れていきたいと思います。

〈報告者：東郷　珠江
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉